

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇「塩ビサッシリサイクル合同WG 活動・調査報告書」発刊に寄せて

樹脂サッシ工業会 技術委員長 村上 敦亮

■ [随想](#)

◇古代ヤマトの遠景（77）－【櫛玉命の誕生】－

木下 清隆

■ [編集後記](#)

■ トピックス

◇「塩ビサッシリサイクル合同WG 活動・調査報告書」発刊に寄せて

樹脂サッシ工業会 技術委員長 村上 敦亮

この度、塩ビサッシリサイクル合同WGでは、過去10年間の塩ビサッシリサイクルの研究・調査活動に関して、一冊の報告書としてまとめました。

塩ビサッシリサイクル合同WGとは、資源循環型社会の実現という目標に向かって廃棄塩ビサッシのリサイクルの取組みを進めるため、1999年に社団法人日本サッシ協会（現一般社団法人日本サッシ協会）、プラスチックサッシ工業会（現樹脂サッシ工業会）及び塩ビ工業・環境協会の3団体による、「環境問題対策部会WG」の設置に端を発したWGで、2002年に名称を変更し、現在に至っております。

また活動を行うにあたっては、WG委員長として東京大学大学院 清家剛准教授、経済産業省住宅産業窯業建材課、北海道庁・支庁、札幌市及び実際の収集・処理についての関係業者のご協力をいただきながら、具体的な検討を進めてきております。

塩ビサッシは、気候の厳しい環境でも快適な住環境をつくるため、塩ビ樹脂の特性を最大限生かし開発された窓です。断熱性能・気密性能の高さが支持され、1980年代から北海道の住宅を中心に普及してきました。窓からの熱の出入りは、建物全体においてウェートが大きく、これを抑えることで省エネ効果が高まり暖冷房費の抑制にもつながります。また寒暖差の小さい室温を保つことは、健康で快適な生活にもつながります。

合同WGでは、塩ビサッシの取り付けられた住宅の解体は、住宅の寿命を仮に30年程度と考え、塩ビサッシの廃棄は2010年頃から本格化すると予想しました。

そこで塩ビサッシを普及・販売してきた立場から、リサイクルする仕組みを構築することが出来ないか検討を進めてきました。幸い取組みを開始した時期は、まだ廃棄量も少なく、じっくりと現実的な方法を見いだすことを目標にWGの活動を開始しました。

私たちは、塩ビそのものはリサイクル出来る材料であり、廃棄塩ビサッシも同様にリサイクルが出来ると考えております。現実には1990年代には、ドイツにおいてリサイクルの取組みが始まっておりました。

再生材原料を作り出すためのリサイクルシステムの検討・構築には、実際の作業をされる解体業者やリサイクル業者の御協力が不可欠です。同時にメーカーがこれらの材料を使って、塩ビサッシや他の建材に再利用するための可能性についても検討が必要でした。これらの結果のフィードバックは、シンポジウムの開催などを通じて北海道の関係者などに行き、その後の活動のあり方についても議論を進めてきました。

ここまでの取組みは思うようにいかないことばかりでした。当初、ドイツのリサイクル率は高いという情報があり、また日本でも実験室レベルで到達可能であると確認したことから、解決には時間がかからないだろうと考え、実際の解体現場からの廃棄窓による実験へ取り掛かりました。ところが汚れやシーリングなどが付着した廃棄窓は、リサイクルが非常に困難であり、リサイクル率は50%以下にしかならないという結果を突き付けられたのです。この結果は改めて方向性の再検討をすることとなり、ドイツの実態調査との比較を踏まえながら、日本の実態に即したリサイクルシステムの構築を目指すこととなりました。



住宅解体に伴う塩ビサッシの回収



回収した塩ビサッシ

まだリサイクルへの道半ばですが、10年を一区切りとしてその検討の過程をまとめたものが今回の報告書となります。これまで行ってきた検討内容を皆さんにも広く共有していただき、今後の塩ビサッシリサイクルの方向性について幅広く議論を進めていけたらと思っております。

(2013年9月2日(月)札幌にて、この報告書に関するリサイクルシンポジウムの開催を予定しております。)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景(77) — 【櫛玉命の誕生】 —

木下 清隆

継体王家については、これまでに継体天皇誕生の経緯、西国・九州の制圧について述べたが、更に、磐井の乱と継体天皇とは、深く関わっていたとの視点から、全く新しい磐井像を描いた。この検討過程の中から、欽明天皇誕生の隠された経緯と蘇我氏台頭の理由とが明らかとなってきた。これ以降、話は初代倭王の諡号問題にそれたが、今回からは、再び欽明天皇時代に話を戻すことにする。

＜欽明朝＞

欽明天皇は、その誕生の経緯でも述べたように、継体天皇を崇敬し、更に継体天皇が尊崇してやまない初代倭王に対しても、同様の厚い念があったと想定される。これは、そのように考えないと、その後の彼の事跡を説明できないからである。

欽明朝になっての大きな変化は、朝鮮半島への備えを始めたことである。その具体的な政策は屯倉^{みやけ}の整備である。屯倉の整備事業は安閑天皇時代の事跡として、書紀には記述されているが、ここでは、継体天皇の後継者は欽明天皇と考えているので、この事業は欽明天皇が行ったものと結論されることになる。この様に考えることによって、彼が継体天皇の意思を強く引き継いでいるとの想定が、無理なく裏付けられることになる。

屯倉の話はここではこれ以上深入りしないが、欽明朝の、その次の大きな変化は、出雲に対する態度である。その具体的な表れは、この時代になって出雲に突然巨大な前方後円墳が築造されたことである。これは朝廷と出雲との間で何か起きたと考えない限り説明が付かない。その墳墓は大念寺古墳（九十一m）といい、築造場所は、現在の出雲市駅の直ぐ近くである。JR 線沿いに大念寺という寺がこの巨大古墳を背にして建っているが、奥の古墳はよく見えない。



大念寺 (背景は大念寺古墳を覆う木立)

出雲といえば漠然と出雲全体の話のように思われるかもしれないが、欽明朝に起きたことは、古代出雲の西部に位置する神門郡に限られたことであった。朝廷は直接神門郡に接触したことになる。そうでなければ神門郡の中に、巨大前方後円墳が築造されたことの説明が付かないからである。出雲は東部に^{ひおきべ}出雲臣、西部には神門臣が勢力を張っていた。朝廷は二つの勢力を一体とは見做さず、個別の勢力として対応したことになる。西に大念寺古墳が築造された同じ時期に、殆ど同規模の前方後方墳が出雲東部の松江市に造られていることが象徴的である。その墳墓を山代二子塚古墳（九十二m）という。後円墳では無く、後方墳であるところに彼等の思いが込められている。出雲臣勢力は朝廷の神門郡への配慮が面白くなかったのではなかろうか。この当時の出雲全体のリーダー格が、出雲臣氏であったとすれば尚更であろう。出雲臣は朝廷への服属拒否の意味を込めて前方後方墳を築造したものと考えられる。



山代二子塚古墳

以上に説明したように、欽明天皇により出雲の神門郡へ何らかの接触があったとみられる。その方法は「詔」が出されたのかも知れない。内容はこの地方に対する何らかの敬意の表明だった可能性がある。だから、神門臣達はこれに感謝し、継体王家への服属の意味を込めて、巨大前方後円墳を築造したと見られる。

その敬意表明の意味は、出雲に日置部^{ひおきべ}を置いたことである。このことは書紀には書かれていないが、『出雲国風土記』には記載がある。風土記の内容を分かり易い文にすると次のようになる。

「日置郷は欽明天皇の御世に、日置の伴部^{ともべ}らが遣わされて宿停し、政を為した所なので日置と言う」

この内容は、風土記の中の神門郡に関する記述の中に出てくるものである。日置郷の名称の由来が説明されているが、欽明天皇の時代に日置伴部が遣わされ、この地に住み着いて、政を為したから日置という、といった意味である。なお、日置はその後、「ヘキ」と読まれるようになっており、この日置の郷は現在の出雲市塩冶町を含む一帯と想定されている。おおよそ出雲市駅の南方一帯である。

日置部は、欽明朝以前には存在していなかったことから、この時代に新たに設置されたことになる。では、日置部は何をその職責としていたのか、政を為したとはどのような意味なのか、これらを検討する必要がある。日置部については、上田正昭氏の『日本古代国家論究』（塙書房、一九六八）の中に詳しい検討がなされている。タイトルは「日祀部^{ひまつり}と日置部」（二三六p）となっており、その内容を要約すると次のようになる。

- ① 日置部は神事や祭祀と関係のある部であって、その後、日の神の霊をうける日継ぎの神事とのかかわりから、その象徴としての火継ぎの行事にも関係するようになった。
- ② 日置部と日祀部^{ひまつり}との間には、ともに宗教との係わりがあるにも拘らず、その内容上だけでなく、設定の時期も相違があったと考えられる。理由はその全国の分布状況にある。
- ③ 日置部の分布は、畿内・畿内周辺・西日本に多く、出雲におけるこの集団の分布は濃厚である。これに対し、日祀部は東国・西国の周辺に多く分布しており、このことから、日置＝日祀とはいえない。

（なお、上田氏は、資料として全国の日置郷・日置神社等の存在する場所として、出雲以外に二十七カ所を挙げている。）

このような、上田氏の検討結果より、日置部は出雲を中心に、全国約三十ヶ所に活動拠点を持つシステムとして機能していたことになる。ここに出てくる日祀部は次の敏達天皇の項で説明するが、この日祀部と日置部とは異なるとするのが上田氏の結論である。日置部の職能は神事や祭祀に関係があるとの指摘から、出雲の神門郡に係わる特定の何かの祭祀に係わっていたことになるが、ここまで来ればその特定の何かはすぐ分かる。それは初代倭王の御魂以外には考えられない。欽明天皇は初代倭王の御魂を故郷神門の地でも祭祀させたのである。その祭祀のための組織が日置部だったことになる。

この部に使われている「日」については、欽明天皇が初代倭王に贈った諡号、即ち、「^{くしたまにぎはやひのみこと}櫛玉饒速日尊」によるものであった可能性はある。この諡号は、先に説明したフルネームの略称ではなく、その後半部分が欽明天皇によって、先ず贈られたという意味である。歴史的にはこのときから、先王に対し諡号を贈るという風習が始まることになる。日置部の設置と櫛玉饒速日尊の祭祀が関係あるとするなら、櫛玉饒速日尊は簡単に「饒速日尊」或いは「櫛玉命」と略称されて、倭国内の一部で祭祀され始めた可能性が出てくる。倭国の創始者として、その力にあやかりたいとの願いからでた民間祭祀である。

このような、欽明天皇の出雲への配慮に対して、神門臣達が歓喜しないはずが無い。先に天皇から何か「詔」が出された可能性を述べたが、日置伴部を遣わす前に朝廷から、櫛玉饒速日尊の祭祀についての趣旨説明と、打診があったと想定される。実際の祭祀は日置伴部等が天皇の勅命を受けて行なったと考えられるが、神門臣氏も大いに協力したはずである。

ここでは、巨大前方後円墳の築造と日置部の設置を別個に論じたが、以上に論じたようにこれらは一体となっており、日置部設置が原因で巨大墳墓の造営がその結果ということになる。このように見てくると、神門が初代倭王の出身地であることは、ますます確かなものとなってくる。欽明天皇の時代に日置部が設置されたことは、この天皇が対外的な体制整備に注力しながら、国内的には初代倭王への回帰を果たしていたことになる。継体朝にその萌芽が現れたものを、欽明天皇は更に大きくした。このことでその回帰現象はより鮮明となったが、この現象は、次の敏達朝でピークに達する。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)

「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

すっかり夏らしくなってきました。夏といえば「冷たい麺」。『冷やし中華始めました』の張り紙に『待ってました!』と心の声もれてしまいます。その他にも、素麺、冷麦、お蕎麦はもちろん、うどんも冷やして「冷やしサラダうどん」に、洋風で「トマトの冷製パスタ」。大き目の鍋にお湯を沸かして麺を茹でている間は台所も暑くなり汗だくですが、水にさらして氷で冷やしたりして、ざるや皿に盛り付けて薬味や具材、たれを準備すればOK。この暑さを経ての冷たい麺が良いのです。夏はこれに限ります。ところで、「(揚げ玉入りの)冷やしたぬき」はうどん派、蕎麦派? 私は断然、うどんです。(漠)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp